

[総合研究]

コーポレート・ガバナンス・ディスクロージャーをめぐる諸問題

共同研究者

- 代 表 今 福 愛 志 (日本大学経済学部教授)
佐 藤 信 彦 (日本大学経済学部教授)
田 中 建 二 (日本大学経済学部教授)
高 尾 裕 二 (大阪大学経済学部教授)
古 庄 修 (亜細亜大学短期大学部助教授)
向 山 敦 夫 (大阪市立大学商学部助教授)
山 崎 雅 教 (大東文化大学経済学部助教授)
三 和 裕美子 (明治大学商学部専任講師)

はしがき

本研究の目的は、コーポレート・ガバナンスに関してディスクロージャーという観点から接近し、これまでのコーポレート・ガバナンスの新たな側面について検討するところにある。その際のキーコンセプトがコーポレート・ガバナンス・ディスクロージャーという新たな概念である。

この研究の枠組みは主としてつぎの3点におかれた。

1. ディスクロージャーによるコーポレート・ガバナンス問題:
2. コーポレート・ガバナンスに関するディスクロージャー問題:
3. コーポレート・ガバナンス・ディスクロージャーをめぐる株式会社の組織構造の編成問題:

すでにこれら3つの課題については、昨年の本誌で詳細に検討されている。本号においては、このうち2に関連する問題が2つ取りあげられている。田中論文は、コーポレート・ガバナンスが企業において有効に機能しているのかどうかについて、デリバティブのリスク管理を主題として明らかにしている。すなわち、内外のヘッジ会計規制とディスクロージャーの問題が次第に定量的情報だけでなく定性的情報、時価情報から将来情報に向かっており、リスク管理そのものの重要性の増大とともにディスクロージャーの質的な転換が国際的に起こっている動向が詳細に明らかにされている。

一方、佐藤論文では、コーポレート・ガバナンスにとってもっとも重要な問題である経営者の稼得したパフォーマンス、すなわち業績とはなにかという課題をイギリスの最近の財務業績報告をめぐる会計基準の動向をもとに、検討されている。経営者のパフォーマンスは必ずしも会計上の業績によってすべて評価され、それにもとづいて経営者報酬が決められるわけではないとしても、会計上の業績はそれを判断する際の重要な情報のひとつであることに違いはないであろう。

パフォーマンスの認識・測定・ディスクロージャーに大きな変化が生じている。そこでは従来の営業活動や財務活動だけでなく「資産または負債項目の評価差額」もまた財務業績のなかに合算されている。

以上のべた 2 つの研究成果をもって，本研究で提示されたすべての課題が明らかにされたといえるであろう。

(今福愛志稿)